

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 21 日現在

機関番号：31308

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2016

課題番号：26750274

研究課題名(和文) 比喩的な指導言語を用いた幼児期における運動指導モデルの構築

研究課題名(英文) Study on figurative language instructional model in early childhood physical education

研究代表者

永山 貴洋 (Nagayama, Takahiro)

石巻専修大学・人間学部・助教

研究者番号：20451502

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、幼児を対象とした比喩的な指導言語を用いた運動指導モデルを構築することである。優れた幼児体育指導者は、比喩的な指導言語を用いて運動指導をする際には、幼児と共感的な関係を構築すること、幼児の自発的な気づきを喚起すること、そして日常の中で動作を省察するように促すことが重要だという信念を有していた。本研究の結果として、幼児と共感的な関係を構築した上で比喩的な指導言語を用いて動作を指導し、幼児自らが動作の感覚に気づくことができるように促す運動指導モデルが構築された。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to construct figurative language instructional model in early childhood physical education. Expert physical education teachers' beliefs about figurative language instruction could be explained by ideas that fall under three categories: "empathic relationship-building," "evocation of spontaneous awareness," and "encouraging everyday reflection." Expert physical education teachers encouraged infants in exploring sensations of motor skill through figurative language selected as part of the responsive relationship, thus enabling infants to attach their own meaning to their experiences.

研究分野：スポーツ心理学

キーワード：比喩的な指導言語 幼児期 運動指導 認識論的信念 相互作用

1. 研究開始当初の背景

幼児期にどのような運動を経験するか、そして基礎的な運動スキルを習得しているかどうかは、その後の運動発達に大きな影響を及ぼすとされている。近年、幼児の運動能力が低下傾向にあることが指摘されており、その一因として指導者の力量不足が問題となっている。杉原ら(2010)は、幼稚園での1ヶ月あたりの運動指導の頻度と幼児の運動能力の関係性について調査した。そこでは、専門的な運動指導を受けていない子どもの方が指導を受けている子どもよりも運動能力が高い傾向があったことが報告されている。この調査結果は、幼児にとって適切な運動指導が行われなければ、指導者の存在が幼児の運動発達を阻害する可能性を示唆している。それでは、幼児期の子どもに対する適切な指導とはどのようなものなのであろうか。幼児期の運動発達については、熟達化に関する研究の中でこれまでも盛んに議論されてきた。Weinberg, R. S & Gould, D (2010)によれば、スポーツの才能発達において、導入期は、様々なスポーツに挑戦し、スポーツへの愛着を発達させる段階であり、子どもたちは自由に活動に参加し、楽しみ、多くの成功体験を得ることが重要な時期である。こうした熟達化研究の知見から、幼児期の子どもに対する運動指導では、子どもが当該活動に限らず様々な体験を通して多くの楽しみや達成感を得ることができるような指導が求められるといえる。しかしながら、日本の幼児体育現場では、幼児期の特徴に応じた指導が十分に行われているとはいえない。杉原ら(2010)は、運動指導が幼児の運動能力発達を阻害する原因として、一斉指導形式の指導、幼児期に必要な基礎的な運動が指導されないこと、そして子どものやりたくない運動をさせていることをあげている。幼児期の運動発達を促すためには、こ

うした指導現場における問題を解決し、一方向的な指導ではなく、幼児の発達の特徴に応じた相互応答的な指導を行う指導者を育成する必要がある。指導現場での課題をふまえ、本研究では、優れた幼児体育指導者が幼児との相互作用の中で得られた情報をどのように自身の認識論的信念と照らし合わせ、指導しているのかについて明らかにし、分析結果を指導現場に還元することを目指すものである。

さて、本研究は、指導者と幼児の相互作用について比喩的な指導言語の視点から検討する。本研究で比喩的な指導言語に注目する理由としては、北村(2011)による「わざ言語」についての言及があげられる。すなわち、「わざ言語は、受け止める人の状態や体験によって作用力が異なる。したがって、わざを教え学ぶ場では、感覚の共有が重要な意味をもつ。」「わざ言語」とは、記述言語とは異なる比喩的な表現を用いた言語(生田, 2007)であり、北村による「わざ言語」についての指摘は、運動指導における比喩的な指導言語についても適用できると考えられる。比喩的な指導言語は、受け手(本研究の場合は幼児)の状態や体験を考慮した上で、使用されなければ、学びには作用しない。ゆえに、比喩的な指導言語を通して幼児期の運動発達を検討することは、指導者と幼児双方の視点から動作の感覚の共有がいかに行われ、幼児が動作を習得しているのかについて検討することにつながるといえよう。ところで、これまでのスポーツ領域の指導言語に関する研究では、言語自体が選手に与える影響について調査したもの、特定の指導場面で使われる指導言語を集めたものが多く、指導者と選手の相互作用の中で言語がどのように利用され、選手の学習に作用しているのかについて十分に検討されてこなかった。本研究ではまず、優れた幼児体育指導者が幼

児の運動学習をどのように捉えているのか、対象者のもつ認識論的信念について明らかにする。認識論的信念とは、特定の知識の性質、知識の習得についての信念であり、指導者の認識論的信念は具体的な指導行動に影響を及ぼすといわれている。優れた幼児体育指導者の運動学習に対する認識論的信念を調査することで、先行研究とは異なる指導者と学習者の相互作用の視点から指導言語について検討する。

2. 研究の目的

本研究の目的は、優れた幼児体育指導者は、どのような認識論的信念のもと運動指導を行っているのか、そして幼児との相互作用の中で、認識論的信念のもとにどのように比喩的な指導言語を選択して指導しているのか、この2点について明らかにし、比喩的な指導言語を用いた幼児期における運動指導モデルを構築することである。

3. 研究の方法

まず、幼児体育指導者の運動学習に対する認識論的信念を明らかにすることを目的として、優れた幼児体育指導者を対象に調査を実施した。データ収集は、予め基幹的な質問項目を設定した半構造的インタビューを用いて実施した。インタビューデータは、調査終了後に調査者によって直ちにテキスト化され、標題作成、サブカテゴリー作成、カテゴリー概念化、そして信頼性検証の順で分析された。続いて、幼児教育について初学者である養成課程に在籍する大学生を対象として同様の調査を実施し、調査結果を照らし合わせることで、優れた幼児体育指導者の有する信念の特性を検討した。

次に、優れた幼児体育指導者が幼児との相互作用の中でどのように比喩的な指導言語を選択し、指導しているのかについて明らかにするために、幼児体育指導者及び幼

児体育教室に通う幼児を対象として調査を実施した。具体的には、幼児体育指導者にワイヤレスマイクを装着してもらい、幼児体育教室の指導場面を録画した。その録画した映像の中から比喩的な指導言語を用いた場面を抽出し、用いられている比喩的な指導言語、比喩が用いられた場面、そして、比喩が用いられる前後の指導者と子どもの行動を指導者の信念と照らし合わせ、どのような意図で指導言語が用いられているのか分析した。

4. 研究成果

本研究の結果、優れた幼児体育指導者の幼児期の運動学習に対する認識論的信念は、「共感的な関係構築」、「自発的な気づきの喚起」、及び「日常的な省察の促進」の3点から説明されることが明らかとなった。優れた幼児体育指導者は、動作の感覚を表現する言葉の意味を幼児と共有するために共感的な関係を築こうとしていた。そして、共感的な関係を構築した上で、幼児の認知特性や状況に応じた言葉を用いて動作を指導することで、幼児自らが試行錯誤して動作の感覚に気づけるようになると考えていた。さらに、優れた幼児体育指導者は、動作を習得するためには、幼児体育の時間ばかりでなく、日常の遊びの中で動作が行われるように意図して言葉がけを行うべきだと考えていた。こうした考えの背後には、動作スキルは指導者から与えられるものではなく、幼児が日常における遊びの中でも動作を試行錯誤して習得すべきだという知識獲得に関する認識論的信念があるといえる。ただし、この幼児の自発的な動作の感覚への気づきは、放任を意味するのではなく、幼児が自分で動作の感覚に気づけるよう指導者が仕掛けた結果によるものである。優れた幼児体育指導者は、幼児が運動に対して積極的に関わるよう促すために、幼児

の成功体験を保証する必要性を認識していた。そして、優れた指導者は幼児の成功体験を保証するために動作習得、指導に関する普遍的な知識をもつべきだという信念を有していた。一方、養成課程の大学生の幼児期における運動学習についての認識論的信念は、「運動参加の促進」、「応答的な指導」、及び「継続への志向形成」の3点から説明される。養成課程の大学生は、幼児期における運動がもたらす恩恵を認識しており、幼児期は運動の楽しさ感じる体験を蓄積し、その結果として運動継続への資源づくりを行う時期であると考えていた。そして、運動継続への志向性が形成されるためには、幼児の発達特性を多角的に理解し、自分の考えを押し付けるのではなく、幼児を主体とした適応的な指導を行うべきだと考えていた。こうした考えの背後には、優れた幼児体育者と同様に知識は権威者によって与えられるのではなく、幼児が自ら獲得すべきだという知識獲得に関する信念が認められた。知識獲得に関する信念は、優れた指導者と学生に違いがみられなかったが、知識の普遍性については、異なる信念が確認された。幼児体育指導者が幼児の成功体験を保証するための普遍的な知識の必要性を認識しているのに対し、養成課程の大学生は、動作の習得、指導について普遍的な知識はないと考えていた。これは、知識の普遍性を認める指導者とは異なる結果であり、この信念の違いが指導場面での言語選択にどのように影響を及ぼしているのか、今度さらに検討する必要がある。

次に、優れた幼児体育指導者が実際の指導場面で比喩的な指導言語をどのように用いているのか分析したところ、比喩的な指導言語は、体育教室開始、終了時、ホール内の移動などのマネジメント場面、運動技能の説明を行うインストラクション場面で主に使用されていた。このうち、インスト

ラクション場面において、比喩的な指導言語は、(1)動作全体のイメージを提示すること(2)動作の適切な形を示すこと(3)動作のタイミングを示すこと(4)適切な動作の結果として得られる動作の感覚を示すことを意図して用いられていた。優れた幼児体育指導者は、幼児との相互作用の中でその子どもの運動発達や言葉の理解の程度に合わせて比喩的な指導言語を選択していた。具体的には、跳び箱や縄跳びなどの運動経験が比較的少ない年中児に対しては、動作全体を表す比喩や適切な動作の形を示す比喩を提示し、幼児が動作の全体像をイメージできるように指導している場面が多く観察された。一方で、運動経験が比較的豊富であり、幼児体育教室で使用される言葉の理解が進んだ年長児に対しては、動作のタイミングや適切な動作の結果として得られる動作の感覚を比喩で示し、幼児が自分で動作を修正したり、適切な動作の感覚に気づくことができたりするように働きかけている場面が多く観察された。また、対象が集団か個人かで利用する指導言語を使い分けていた。集団に対して用いる言語は、その言葉で表現される意味を集団の中で共有した上で用いていた。一方、個人に対する指導場面では、幼児の認知特性を把握した上で、動作を表現する言語を選択しており、幼児の自発的な学びを促すことを重視する指導者の信念が、比喩的な指導言語の使い方にも関係していることが明らかになった。

以上の研究結果から、幼児と共感的な関係を構築した上で比喩的な指導言語を用いて動作を指導し、幼児自らが動作の感覚に気づくことができるように促す運動指導モデルが構築された。

5. 主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

ホームページ等

〔雑誌論文〕(計 1 件)

永山貴洋・小学校教員養成課程に在籍する大学生の体育授業についての認識論的信念の質的分析 .石巻専修大学研究紀要, 査読無, 27, pp.83-91, 2016.

〔学会発表〕(計 4 件)

永山貴洋・佐藤誠子・教授されたルールの適用に関連する学習者要因の検討(2)-ルール適用場面における認識的信念に着目して-.日教育心理学会第 58 回総会. 2016 年 10 月 9 日. サポートホール高松(高松市).

永山貴洋・大学生は幼児期の運動指導をどのように捉えているのか-保育士、幼稚園教諭養成課程に在籍する大学生の幼児期の運動指導に対する認識論的信念の分析-.日本発育発達学会第 14 回大会. 2016 年 3 月 5 日. 神戸大学(神戸市).

永山貴洋・北村勝朗・小学校教員養成課程に在籍する大学生の体育授業に関する信念-教育実習未経験の大学生を対象とした質的分析-.日本スポーツ心理学会第 42 回大会. 2015 年 11 月 23 日. 九州共立大学(北九州市).

Takahiro Nagayama, Katsuro Kitamura. Physical education teachers' beliefs about figurative language instruction in early childhood. 7th Asian South Pacific Association of Sports Psychology Congress. 2014 年 8 月 9 日. 国立オリンピック記念青少年総合センター(東京都).

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

取得状況(計 0 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年月日:
国内外の別:

〔その他〕

6. 研究組織
(1) 研究代表者
永山貴洋(NAGAYAMA, Takahiro)
石巻専修大学・人間学部・助教
研究者番号: 20451502